博士学位取得者記念講演会

宮沢賢治の〈郊外〉

博士論文「宮沢賢治の空間意識―造園学からのまなざし―」（要旨）

宮沢賢治の文学は同時代の諸文化や社会情勢の影響を多大に受けている。本稿では、それらの中でも、今までほとんど論じられることのなかった造園学に焦点をあて、特に、当時の造園学を象徴する「装景」（風景装飾術）という思想と、賢治文学との深い関わりについて論述した。

第一章「宮沢賢治と造園学」

地方都市花巻と東京を往還する中で培われていった賢治の文学観の変遷を辿り、そこに造園学の知識がどのように関わっていったのかを考察した。

第二章「公園のある風景」

童話「虔十公園林」を取り上げ、「装景」の具体例である「公園」の描かれ方に注目した。

第三章「『ポラーノの広場』論―『広場』空間の変容」

「装景」の具体例である「広場」という空間に着目し、その特質（「空間の変貌」と「見立てによる創出」）を考察した。

第四章「『ポラーノの広場』論＝　或るモダン青年の手記」

語り手の青年・キューストを「サラリーマン」と捉え、その設定の同時代的意味を考察。

第五章「『ポラーノの広場』論Ⅲ〈作家〉の誕生―〈書斎〉の役割―」

キューストの住居の変化と、作品内で果たす役割の変化が連動して描かれている意味を明らかにした。

第六章「賢治の〈郊外〉―まなざしの交錯する場所―」

造園学をはじめ同時代で多岐にわたって注目されていた〈郊外〉を重点的に取り上げ、両義的かつ可動的な空間である〈郊外〉が、賢治の空間意識とどのように関わっているのかを検討した。

各章では、造園学が賢治に及ぼした多大な影響を確認しながら、賢治文学における空間の特徴について分析をすすめた。同時代性を重視しながらも、そのフィルターを通してこそ顕在化する、賢治文学の独自性を提示していくことが本稿の目指したところである。

2016.3.17

森本　智子

＊本講演では、第六章を中心に取り上げる。

一、「庭」という概念の変容

一九一五年九月二十一日　宮沢清六宛書簡

こちらは変りはありません。先頃は走ってやっと汽車に間に合ひました。あの夕方の黒松の生えた営庭の草原で、ほかの面会人たちが重箱を開いて笑ったりするのを楽しく眺め、われわれもうすく濁った赤酒を呑み、柔らかな風を味ひうるんだ雲を見ながら何となく談してゐた寂かな愉悦はいまだに頭から離れません。いろいろな暗い思想を太陽の下でみんな汗といっしょに昇華さしたそのあとの楽しさはわたくしもまた知っています。われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦痛を享楽できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。

田村剛『造園概論』（一九一八、成美堂）

＊日本で最初の造園学文献。

現今欧米諸国の造園界の体勢は庭園より公園に、市内公園より市外公園に、更に進んでは森林公園・国立公園といふやうな大規模のものに進んで来て、所謂国土修飾といふ大きな問題に逢著しゝあるのである。即ち最近の傾向は建築は勿論山水明媚な名所や風景、更に進んでは農業も林業も、又土木をも包括して、所謂国土の風景を造る所の各要素を統合し、そして全体として一貫した風致を造らうとするのである。かゝる新傾向を眼前に控へて見ると、在来の庭園とか園囿とかいふ語は如何にも其意味が狭少であるから、余は茲に「風景装飾」或は「装景」といふ新熟字を作つたのである。（中略）

装景は人工によつて破壊せられた風景や天然風景の欠陥を見出して、これに修飾を加へることを主眼とするものである。

☆「造園学」の守備範囲（「装景」の具体例）

↓都市・広場・公園・建築物・郊外住宅など

二、〈郊外〉という場所

☆「郊外」とは？

「郊」の字源＝都の外れ、果て。

↓それ自体で自立した領域ではなく、都市との関係においてのみ現出する空間であり社会。

〈郊外〉の語の意味の変遷

①江戸～明治中期

＊都市近郊の原野。散策地。または農地。

←国木田独歩「武蔵野」の影響

②明治後期～関東大震災前後

＊散策地と、住宅地のはざま

③昭和初期～中期

＊都市のアパートと郊外住宅の開発が同時に進行。

←都市の拡大、周辺の開発

④戦後～現在

＊団地、ニュータウン（大都市のベッドタウン化、ロードサイドの発展

＊②～③の時期の〈郊外〉の捉え方

旧世代＝散策する場所（近郊）

←→

若い世代＝憧れの住宅地

＊「郊外」の捉え方には、メディアから発信される情報への敏感さが作用する。また、「郊外」は、①～③の時期、「町外れ」の同義語としても使用されていた。

玉井廣平『新興の郊外　井荻町誌』一九二八／社会基調協会）

（＊独歩「武蔵野」から本文を一部引用しつつ）これは国木田独歩が明治三十四年三月の文であるから、渋谷、世田ヶ谷、中野あたりの林に行つて見ろなどゝいふことを書いたが、今あの辺は所謂文化住宅や店舗が櫛比して、到底何処にも其の面影を尋ぬべくもない。我が井荻町などに於ても、僅かにあつちの隅こつちの丘に、取り残された林や茅原などが、漸く息づいて居て、武蔵野の片影を留めて居るに過ぎない。

天気のよい日などに散歩すると、ライト式、バンガロー式、セセッション式、其他和洋折衷とりどりの住宅が立ち並んで、庭には芝生、花壇、温室などを設けた所もあり、子供のある家ではブランコやスベリ台まで設備し、如何にものんびりとして住み心地のよさそうな田園住宅がふえて来て居る。（中略）

昔の武蔵野を思ひながら、其の武蔵野の真中頃であつた井荻の町の将来に、此のさゝやかな一冊のブックが何かしら貢献する所があつたなら編者の誠に本懐とする所である。

中村義男「ウイークエンドハウス」（「住宅」一九三三年五月号）

郊外生活の良いことは今さら云うまでもないことですが、郊外で住めない忙しい人も、終末土曜日から月曜の朝迄、遊びに行く生活が大流行です。

これは最も能率の良い生活で、気分の転に於ても、毎週新しい気持ちで仕事が出来ることと思われます。

此種の家は山とか海辺、川の辺りに建て、普通の住宅の様な堅苦しい門とか塀とか、ないのが良いのです。

宮沢賢治「ポラーノの広場」（一九二七～三一／生前未発表）

＊賢治の四大少年小説の一つ。語り手の青年キューストが、地方都市・モリーオの役人であったころ、農夫の少年・ファゼーロ達とともに、地方伝承のユートピア「ポラーノの広場」を探索するが挫折するも、やがてファゼーロ達が理想の広場を自らの手で創設するに到る顛末を、七年後、遠く離れた都会からキューストが回想する、という物語。賢治の自伝的要素の強い作品として論じられることが多い。

↓今回は、当時の〈郊外〉をめぐる状況と重ねて読むことを試みる。

〈本文1／プロローグ部〉

そのころわたくしはモリーオ市の博物局に勤めて居りました。

①十八等官でしたから役所の中でもずうっと下の方でしたし俸給もほんのわづかでしたが　受持ちの標本が標本の採集や整理で、生れ付き好きなことでしたから　わたくしは毎日ずゐぶん愉快にはたらきました。殊にそのころ、モリーオ市では競馬場を植物園に拵へ直すといふので、その景色のいゝまはりにアカシヤを植ゑ込んだ広い地面が、切符売場や信号所の建物のついたまゝわたくしどもの役所

の方へまはって来たものですから、②わたくしはすぐ宿直といふ名前で月賦で買った小さな蓄音機と二十枚ばかりのレコードをもってその番小屋にひとり住むことになりました。わたくしはそこの馬を置く場所に板で小さなしきゐをつけて③一疋の山羊を飼ひました。④毎朝その乳をしぼってつめたいパンをひたしてたべ、それから⑤黒い革のかばんへすこしの書類や雑誌を入れ、靴もきれいにみがき、並木のポプラの影法師を大股にわたって市の役所へ出て行くのでした。

あのイーハトーヴォのすきとほった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波、またそのなかでいっしょになったたくさんのひとたち、ファゼーロとロザーロ、羊飼いのミーロや、顔の赤いこどもたち、地主のテーモ、山猫博士のボーガント・デストゥパーゴなど、いまこの暗い巨きな石の建物のなかで考へてゐると、みんなむかし風のなつかしい青い幻燈のやうに思はれます。

では、わたくしはいくつかの小さなみだしをつけながらしづかにあの年のイーハトーヴォの五月から十月までを書きつけませう。

〈本文2／第一章　遁げた山羊〉

五月のしまひの日曜でした。わたくしは賑やかな市の教会の鐘の音で眼をさましました。もう日はよほど登って、まわりはみんなきらきらしてゐました。時計を見るとちゃうど六時でした。わたくしはすぐチョッキだけ着て山羊を見に行きました。すると小屋のなかはしんとして藁が凹んでいるだけで、あのみぢかい角も白い髯も見えませんでした。

「あんまりいい天気なもんだから大将ひとりでかけたな。」

わたくしは半分わらふやうに半分つぶやくやうにしながら、向ふの信号所からいつも放して遊ばせる輪道の内側の野原、ポプラの中から顔をだしてゐる市はづれの白い教会の塔までぐるっと見まはしました。

☆〈ブッキッシュ〉なキュースト

〈第四章：「山猫博士」と決闘まがいの事件を起こした後、ファゼーロが失踪。キューストは想像をめぐらせる〉

あの青い半分の月あかりのなか、争って勝ったあとのあの何とも云はれないさびしい気持ちをいだきながら、ファゼーロがつめくさのあをじろいあかりの上に影を長く長く引いて、しょんぼり帰って行った、そこには麻の夏外套のえりを立てたデストゥパーゴが三四人の手下を連れて待ち伏せしてゐる、ファゼーロがそれを見て立ちどまると向ふは笑ひながらしづかにそばへ追って来る、いきなり一人がファゼーロを殴りつける、みんなたかって来て、むだに手をふりまはすファゼーロをふんだりけったりする、ファゼーロは動かなくなる、デストゥパーゴがそれをまためちゃくちゃにふみつける、えゝもう仕方ない持ってけ持ってけとデストゥパーゴが云ふ、みんなはそれを乾溜工場のかまの中に入れる。わたくしはひとりでかんがへてぞっとして眼をひらきました。（中略）

わたくしはその一人一人がデストゥパーゴかファゼーロのやうな気がしてたまりませんでした。鳥打帽子を深くかぶった少年が通るとファゼーロが遁げてこゝをそっと通るのかと思ひ　肥った人を見るとデストゥパーゴが、わざとそんな形にばけて様子をさぐってゐるのだと思ひました。

第六章でファゼーロが帰還した際の二人の会話。

「ぼく、どうしても、うちへはいれなかったんだ。そしてうちを通り越してもっと歩いて行った。すると夜が明けた。ぼくが困って坐っていると革を買う人が通ってその車にぼくをのせてたべものをくれた。それからぼくはだんだん仕事も手伝ってとうとうセンダードへ行ったんだ。」

「そうか。ほんとうにそれはよかったなあ。ぼくはまたきみがあの醋酸工場の釜の中へでも入れられて蒸し焼きにされたかと思ったんだ。」

「ぼくはねえ、あっちで技師の助手をしたんだ。するとその人が何でも教えてくれた。薬もみんな教えてくれた。ぼくはもう革のことなら、なめすことでも色を着けることでもなんでもできるよ。」

☆キューストという人物造形の背景

西村伊作『現代人の新住家』（一九一九／文化生活研究会）

平凡な土地に見へても、住み慣れるに従って、面白い絵になる風景が発見され、詩になる生活を味ひ得ることの出来るやうになる、そんな土地を授かったなら幸福であります。

〈「番小屋」のイメージ〉

キューストが「宿直」として仮住まいしていた「番小屋」の位置と形状を一九三〇年代に戻して考えると、郊外住宅のイメージと重なり、当時流行の郊外生活のスタイル、ウイークエンドハウスのような形状でもあることが見えてくる。つまりキューストは、「競馬場」とその「番小屋」をいわば、《庭付き一戸建て》住宅として見立てていたことになる。

←一方、読者にとっても

情報を持たない人にとっては、単なる競馬場の番小屋に過ぎない場所も、郊外住宅の知識を持つ、メディアに敏感な人物にとっては、流行の文化住宅や、ウイークエンドハウスとして捉えられるように設定されている。

☆作品が執筆された頃、盛岡市では「市営住宅」（文化住宅）の造営が次々行われていた。

北田盛岡市長談「市将来の発展は郊外に向ってー隣接村落併合は村民本意に／市営住宅は今後引き続き建築」（「岩手日報」一九二三・六・二七）

市将来のことを考慮すると公園附近の耕地などの何も今直市街にしなくとも何時でも利用が出来るのみではない、市内の空地は忽にして家屋が建つものである、其処で先づ将来は大工場も設置されるであらうとの予想から現在の市の近郊に余裕を求めて其方面に発展の余地を作って置かねばならぬ、市営住宅を外加賀野中津川原に建築するのも要するに当市今後の発展は漸次郊外に向ふことを予想したからのことである、

三、賢治の〈郊外〉

宮沢賢治「虔十公園林」（一九二三頃）

次の年その村に鉄道が通り虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に虔十の林だけはどう云ふわけかそのまゝ残って居りました。

宮沢賢治「二人の役人」（一九二三頃）

その頃の風穂の野はらは、ほんたうに立派でした。

青い萱や光る茨やけむりのやうな穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗の木やはんの木の小さな林もありました。

野原は今は練兵場や栗の畑や苗圃などになってそれでも騎兵の馬が光ったり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通ってもなかなか奇麗ですけれども、前はまだまだ立派でした。

九月になると私どもは毎日野原に出掛けました。殊に私は藤原慶次郎といっしょに出て行きました。町の方の子供らが出て来るのは日曜日に限ってゐましたから私どもはどんな日でも初蕈や栗をたくさんとりました。ずゐぶん遠くまでも行ったのでしたが日曜には一層遠くまで出掛けました。（中略）

寺林といふのは今は練兵場の北のはじになってゐますが野原の中でいちばん奇麗な所でした。はんのきの林がぐるっと輪になってゐて中にはみじかいやはらかな草がいちめん生えてまるで一つの公園地のやうでした。

昔街端れでも今は市街の中心ー水沢町の馬検場／移転説称へらる『岩手日報』（一九二七・七・六）

水沢町の馬検場は設置の当初は衛生上其他を考へ街端れの積もりで現在の個所に設けられたのであるが其後町の発展と共に市街の中心地となり附近には町役場、裁判所等の官衙が建てられた人家も櫛比して来た結果衛生上にも亦市街美の上から考へても現在の場所は不適当であるとて移転説が盛んにとなへられるに至ったがこれが候補地としては立町裏の水田地が挙げられて居り移転説が具体化するのもあまり遠い事ではなかろう

☆岩手県においても、野原や山地を都市がスプロールし、〈郊外〉が拡大しつつあった。

〈本文3／第二章　ポラーノの広場〉

（二、つめくさのあかり）

「上の方が北だよ。さう置いてごらん。」

ファゼーロはおもての景色と合せて地図を床に置きました。

「そら、こっちが東でこっちが西さ。いまぼくらのゐるのはこゝだよ。この円くなった競馬場のこゝのとこさ。」

「乾留工場はどれだらう。」

「乾留工場って、この地図にはないね、こっ

ちかしら。」わたくしは別のをひろげました。
「ないなあ　いつころからあるんだい。」
「去年からだよ。」
「それぢゃないんだ。この地図はもっと前に測量したんだから。その工場はどんなとこにあるの。」
「ムラードの森のはづれだよ。」

←第六章では、この「はづれ」とされた場所が←「広場」(中心)創設の場所となる。

「さうだ、ぼくらはみんなで一生けん命ポラーノの広場をさがしたんだ。けれども、やっとのことでそれをさがすと、それは選挙につかふ酒盛りだった。けれども、むかしのほんたうのポラーノの広場はまだどこかにあるやうな気がしてぼくは仕方ない。」
「だからぼくらは、ぼくらの手でこれからそれをへようでないか。」
「さうだ、あんな卑怯な、みっともない、わざとじぶんをごまかすやうな、そんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行って歌へば、またそこで風を吸へばもう元気がついてあしたの仕事中からだいっぱい勢がよくて面白いやうなさういふポラーノの広場をぼくらはみんなでこさへよう。」

☆賢治作品における、まなざしの双方向性

「狼森と笊森、盗人森」(一九二二頃)

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森で、その次が笊森、次は黒坂森、北のはずれは盗森です。
この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知っているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巌が、ある日、威張ってこのおはなしをわたくしに聞かせました。
ずうっと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすっかり埋ずまりました。このまっ黒な巨きな巌も、やっぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのだそうです。
噴火がやっとしずまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、とうとうそこらいっぱいになり、それから柏や松も生え出し、しまいに、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っているだけでした。するとある年の秋、水のようにつめたいすきとおる風が、柏の枯葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠には、雲の影がくっきり黒くうつっている日でした。
四人の、けらを着た百姓たちが、山刀や三本鍬や唐鍬や、すべて山と野原の武器を堅くからだにしばりつけて、東の稜ばった燧石の山を越えて、のっしのっしと、この森にかこまれた小さな野原にやって来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしていたのです。

「山男の四月」(初期形)(一九二三頃)

山男は野原を渡って、次の七つ森の麓まで来ました。山男は其処で大急ぎで形をすっかりなみの人に変へました。そして、のそのそ、町へはいって行きました。

「雨ニモマケズ」手帳の走り書き(一九二七)

大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ
マタ北上峡野ノ松林ニ朽チ
埋レンコトヲオモヒシモ
父母ニ共ニ許サズ
痩躯ニ薬ヲ仰ギ
熱悩ニアヘギテ唯
是父母ノ意
僅ニ充タンヲ翼フ

〈賢治の郊外〉
①大都郊外
②北上峡野ノ松林

両者は、ともに都市に隣接した空間であるが、その違いは、まなざしの向かう先にある。一方は、都市周辺に拡大を続ける「住宅地」として〈郊外〉を捉える視座であり、もう一方は、迫り来る都市を自らの生活環境の「外れ」として捉える、山野からの視座である。このまなざしの双方向性に、賢治の〈郊外〉の特異性を見ることができる。
それは、〈郊外〉とは、都市の側から一方向にスプロールしてゆく空間である、というわたしたちの既成概念に一石を投じ、この場所への想像力を開く鍵となるにちがいない。

〈参考〉
*〈郊外〉には、境界領域として、不可思議な出来事が発生する場所としての役割もあった。

「セロ弾きのゴーシュ」(一九三二頃)

そのばんおそく、ゴーシュは何か大きな黒いものをしょって、じぶんの家へ帰ってきました。家といっても、それは町はづれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたったひとりですんでゐて、午前は小屋のまわりの小さな畑で、トマトのえだを切ったりキャベジの虫をひろったりして、ひるすぎになるといつも出ていってゐたのです。ゴーシュがうちへ入ってさっきの黒い包みをあけました。それはなんでもない、あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれをゆかの上にそっとおくと、いりなりたなからコップをとって、バケツの水をごくごくのみました。

「銀河鉄道の夜」(一九二四～一九三三頃・第四次稿)

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。
町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしづかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。
そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなって、また眼をそらに挙げました。
あゝあの白いそらの帯がみんな星だといふぞ。
ところがいくら見てゐても、そのそらはひる先生の云ったやうな、がらんとした冷いとこだとは思はれませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のやうに考へられて仕方なかったのです。

←星を見つめていると

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がしたと思ふといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の蛍烏賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦こすってしまいました。
気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。